

二〇二二年度
【博士後期課程】早稲田大学大学院文学研究科
専門科目 日本語日本文学コース入学試験問題
※解答は別紙（縦書）

【答案作成上の注意事項】

- 1 解答用紙の最初に記されている時代・分野のうち、自分の選択したものを○で囲むこと。
- 2、「近代」以外の時代・分野の答案は、縦罫目（表裏）の共通解答用紙に記すこと。
- 3、「近代」は、解答用紙が別になっているので、それを使用すること。

*各時代・分野の試験問題は、左掲のナンバーの問題用紙に記されている。

上代	2
中古散文	3
中古韻文・中世韻文	4
中世散文	5
近世	6
近代	7 10
日本語学	1 11 14
和漢比較文学	15

上代

問 次に掲げた【資料1】・【資料2】について、問イ・ロに答えよ。

【資料1】

天智天皇 遊獵蒲生野時額田王作歌
 萬草指武良前野巡標野行野守者不見哉君

之袖布流、
 天武天皇

皇太子吞御歌 明日香宮御宇天皇

紫草能尔保敵類妹乎尔苦久有者人孺故尔

吾戀目八方、

紀曰天皇七年丁卯夏五月廿日縱獵於蒲

生野于時天皇兼諸王内臣及群臣皆悉從

焉

【資料2】

は狩野の供りなりあやふしき事なりとてやまふ事なり
 天武の時太子を伴ひて蒲生野に遊獵せし時
 萬草を指して武良前野を巡り標野を行き野守を
 見ず君不見とて歌をよみし事なり

問イ 【資料2】は、【資料1】の一首目の短歌の後に記された書き込み部分の拡大である。【資料2】を正確に翻字せよ。翻字にあたっては、漢字・仮名いずれも通行の字体を用いること。改行部分は斜線（／）で示すこと。

問ロ 【資料1】の『万葉集』の短歌二首について、知るところを述べよ。

中古散文

左は、『源氏物語』の注釈書『明星抄』の一節である。次の問いに答えよ。

- (1) 左の全文を改行等そのままに翻字し、適宜必要な箇所句読点、濁点を加えよ。漢字の振り仮名、返り点等も翻字すること。なお、異体字等は、通行の字体に翻字してよいものとする。
- (2) 傍線部①の人物について、説明せよ。
- (3) 傍線部②の注釈書について、説明せよ。
- (4) これは『源氏物語』のどの巻の注釈か。まず巻名を示し、そう判断した理由を説明せよ。

きのはれいりや 源のはるけり也

わりさすゝもさゝも か頭まのり也

① ぎあはれいりや 源のはるけり也
まうーはるけり也

まうーはるけり 惟光うゝあそ也

まうーはるけり 源のはるけり也

まうーはるけり か頭まのり也

きのはれいり 源のはるけり也

きのはれいり 源のはるけり也

② 源のはるけり也 源のはるけり也

きのはれいり 源のはるけり也

きのはれいり 源のはるけり也

きのはれいり 源のはるけり也

きのはれいり 源のはるけり也

きのはれいり 源のはるけり也

きのはれいり 源のはるけり也

きのはれいり 源のはるけり也

きのはれいり 源のはるけり也

中古韻文・中世韻文

左は、早稲田大学図書館・雲英文庫所蔵の北村季吟『百人一首拾穂抄』（文庫三一E〇〇一九）十四丁表である。

次の問い（1）（2）（3）に答えよ。

（1）この資料をすべて改行等そのままに翻字せよ。

ただし、漢字の振り仮名、漢文の返り点・送り仮名、句読点（。）、合点を翻字する必要はない。

（2）「師説」（八行目三字目以下、十三行目四字目まで）は、「為家後撰抄云定家御説」を引いたうえで、この歌の作意をどのように解釈しているか、説明せよ。

（3）注文中に出てくる人名の中から一名を選び、知るところを述べよ。

新古今を思ふに家持もあはれなる文よ
かゝる文は淮南子云鴻鵠填河成橋以度織女
是夕乃成乃くはる夜更なり月ひく橋より
来乃ありあはれくくくくくくくくくくくく
月もなぐすくしつる夜更も天よりみくくくくく
深きあはれくくくくくくくくくくくくくく
まゝに師伝云為家は定家御説はる世のなほ
りて渡れよ深きあはれくくくくくくくくく
おあきくくくくくくくくくくくくくくく
と感情身よよりく天上の鶴は橋よりあはれ
よりくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆふくはあはれ思ふ家持なりけり
よりくくくくくくくくくくくくくくくく

不鮮明箇所…十一行目十三字目「鵠」の振り仮名「カサ□キ」は「カサ、キ」。
難読文字…十三行目行末字は「夜」、十四行目行頭文字は「半」。十四行目五字目は「分」、十字目は「に」。

「近世」

次の日本人が漢詩を記した資料を読んで、後の問に対する答えを解答欄に記入せよ。

風輪旋轉隨豹驅眼見矣
步換須臾按眉還逢古
中秋此宵此月不可孤
掛我杖頭錢猶我舊酒
壚當壚有女顏如玉
倚多月釀之醞醞紅
白沒指呷濡鼻滿酌
不爲憚來虛玻璃一
怪前明鏡照人清光
接眉如頃恍以魂喪
存主無端欲當年
姮娥被起舞郎爲
學鮑老郎歌些些
雜吳歎醉歸影在
地上長盤跚步不
須人扶何閑如頭
傍觀者了齊拍手
笑胡盧

月下醉歸得胡盧
蓮舟太一未定竹
於之

集正



- 問一、この資料の全文を内容を把握して、句読点を付して、楷書に翻字せよ。
問二、この資料の韻字を冒頭から順にすべて書き抜いて、記せ。
問三、問一で付した句読点を生かしながら、この資料を書き下し文に直せ。
問四、この資料の全文を現代語に訳せ。

近代 次の1～3の問いに答えよ。

1、次の資料Aは、「草稿本遠野物語」と呼ばれている柳田国男『遠野物語』第二十二節の草稿である。またBは、この『遠野物語』第二十二節をとりあげた三島由紀夫「小説とは何か」の一節である。三島由紀夫が、「この一行のおかげで、わずか一頁の物語が、百枚二百枚の似而非小説よりも、はるかに見事な小説になっており、人の心に永久に忘れがたい印象を残す」と述べているのはなぜか、三島由紀夫はこの後に具体的な読解・分析をおこなっているが、草稿を読んで自分の言葉で説明せよ。あわせて、文学研究における本文の読解・分析について、あなたが考えていることを述べよ。その際、『遠野物語』や柳田国男の文学史的位置づけや、他の材料などについても自由に言及してかまわない。なお、第二十二節はこれで全部である。(20点)

A

三、佐木の曾祖母がうて死をせし時、
どうをよめて親族の者も来集ひ佛の娘のあ
つた女の心も離縁せられし其の婆敷の
打臥しありしにば(程)は火の氣を絶やすこと
思ひつゝ風ねて母と祖母と二人大なる団圓
裏の両側を坐り母人の側を炭(き)を置きて
炭をゆきをし二ふと裏にのりより足音して
来る者ありを見れば(程)は女より平生

衣の引ずるを三角より上げて前を縫付け
ありがまじくと其通を縫目に見えんや
ありあるやと思ふも二人が坐る櫃のわ
き通よりとて裾を炭取すは(程)はとま
けりう母人の氣まの人をあとをえは人
の心なる婆敷の方へ近づくとと思ふや
狂女(けうにょ)けうにょさき者にておぼえんがまじと
とゆきまじ外の人の心は人を心と
たは打おとつとばうとぞ

B

新らしい本を追いかけて読むよりも、むかし感銘を受けた本を再読して、むかし気づかなかった「小説」をそこに豊富に発見することがある。ただ「小説」と抽象的に言うだけでは、いつまでたつてもあいまいであろうから、端的な実例をあげることにしよう。

私は最近、そういう自分のためのしみのためだけの読書として、柳田国男氏の名著「遠野物語」を再読した。これは明治四十三年に初版の出た本で、陸中上閉伊郡の山中の一聚落遠野郷の民俗探訪の成果であるが、全文自由な文語体で書かれ、わけでも序文は名文中の美文である。この序文についてはあとで触れるとして、私の挙げたいのは、第二十二節の次のような小話である。

(※第二十二節の活字本文を引用)

この中で私が、「あ、ここに小説があった」と三嘆これ久しゅうしたのは、「裾にて炭取にさはりしに、丸き炭取なればくるく」とまはりたり」という件りである。

ここがこの短かい怪異譚の焦点であり、日常性と怪異との疑いような接点である。この一行のおかげで、わずか一頁の物語が、百枚二百枚の似而非小説よりも、はるかにみごとな小説になっており、人の心に永久に忘れがたい印象を残すのである。

こんな効果は分析し説明しても詮ないことであるが、一応現代的習慣に従って、分析を試みることにしよう。

2、次に掲げる六つの資料について、作品の場合は作者名・作品名、雑誌の場合は雑誌名・主要執筆者名を答えた上で、作品についてはその内容や執筆の背景、発表媒体との関わりなど、雑誌の場合は文学史上の意義などを、各七行以内で述べよ。(各10点)

①



壹

古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出来事だと云ふことを記憶してゐる。どうして年をはつきり覚えてゐるかと云ふと、頃僕は東京大学の鉄門の真向ひにあつた、上條と云ふ下宿屋に、此話の主人公と壁一つ隔てた隣同士になつて住んでゐたからである。その上條が明治十四年に自火で焼けた時、僕も焼け出された一人であつた。その火事のあつた前年の出来事だと云ふことを、僕は覚えて

③

この轢から私の著作集の刊行は私の友の足助素一がやつてくれる事になりました。従つて新潮社とは關係が絶たれる事になる譯です。

私の著作集の刊行を企ててくれたのは新潮社でした。賣れても賣れなくつても刊行を續けてもらひたいと云ふ私の要求を快く承諾してくれた代りに、私も書冊の形ではこの著作集の外には作物を發表しない約束をしたのでした。新潮社は私の爲めには十分満足な働きをしてくれました。それを私は始めから今に至るまで深く喜んでゐるのです。

足助が刊行の事を申出てくれた時、彼れの永年の深厚な友情と好意とがあるにも係らず、私は彼れを一時は不快にするまで諾否を躊躇しました。それは新潮社に對して如何にも義理が立たないと思つたからです。然し足助が私の作物を刊行しやうといふ事情は非常に緊迫したものなので、それを熟慮して見ると、どうしても黙つてはゐられなくなりました。そこで私は押切つて新潮社の主人佐藤氏に相談する事になりました。佐藤氏は足助と私の心事と誠實とを諒とし、色々の忍び難い事情を喜んで忍んで、今後のこの事業一切を足助の手に委れてくれました。

私は茲にこの事業の授受が凡て商賈氣を離れた友誼的關係を以て行はれた事を深く満足とするのです。この事を新潮社の名譽の爲めに私は讀者諸君にお告げする義務を感じます。

私の友なる足助が私の爲めに著作集の刊行を企ててくれた事を私は氣持ちよく思ひます。足助は少くとも當分はその全努力を私の著作集の刊行の爲めに費してくれる譯なのです。私は彼れの友情と奮勵とに深い感謝を持たざるを得ませぬ。

一九一八、九月

著者

②



第

一

「參謀本部編纂の地圖を又繰開いて見るでもなからうと思つたけれども餘りの道ぢやから手を觸るさへ曇くるしい旅の法衣の袖をかいて、表紙を附けた折本になつてゐるのを引張り出した。

飛騨から信州へ越える深山の間道で、丁度立休らはうといふ一本の樹立も無い右も左も山ばかりぢや手を伸ばすと達さうな峯があると、其の峯へ峯が乗り、巔が被さつて、飛ぶ鳥も見えず、雲の形も見えぬ。

生れ出る悩み

私は自分の仕事を神聖なものにしようとしてゐた。ねぢ曲らうとする自分の心をひっぱたいて、出来るだけ伸びくした眞直な明るい世界に出て、そこに自分の藝術の宮殿を築き上げやうと邁進してゐた。それは私に取つてどれ程喜ばしい事だつたらう。と同時にどれ程苦しい事だつたらう。私の心の奥底には確かに——凡ての人の心の奥底にあるのと同様な——火が燃えてはゐるけれど、その火を燦らさうとする塵芥の堆積は又ひどいものだつた。かき除けてもく容易に火の燃え立つて来ないやうな瞬間には私は惨めだつた。私は、机の向ふに開かれた窓から、冬が来て雪に埋もれて行く一面の畑を見直しながら、滞りがちな筆を吐りつけく運ばさうとしてゐた。

寒い。原稿紙の手ざりは氷のやうだつた。

陽はすんく暮れて行くのだつた。灰色から鼠色に、鼠色から墨色にほがされた大きな紙を眼の

旗戦

十一月號目次			
小説	小説	戯曲	小説
ある経験	疵だらけのお秋	過剰なる弟達	労働者
片岡鐵兵(三)	西澤隆二(三)	三好十郎(元)	本庄陸男(三)
			小林多喜二(三)
			マラシュキン(三)

無産者新聞防衛委員会の催し 演劇公演・文藝講演会・移動美術展

演劇公演	文藝講演会	移動美術展
解決された問題と新らしき仕事	中野重治(六)	
プロレタリア・チーマ美術について	村山知義(六)	
美術運動に於ける二つの傾向に就て	永田一脩(三)	
帝展	大月源二(三)	
留置場の一角	柳山一正(三)	
抗戦せよ	永田一正(三)	
労働者の団結	永田一正(三)	

十週年記念祭前後

演劇公演	文藝講演会	移動美術展
十週年記念祭の諸段階	秋田雨雀(三)	
日本最初の記念祭	茂森唯士(三)	
忘れられてゐた記念日	山田清三郎(六)	
ソヴェット十週年記念の催し	金親清(六)	
戦列から	次郎(三)	
第三回プロレタリア美術祭をめぐりて	杉本良吉(三)	

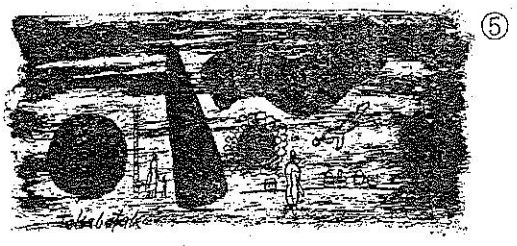
一女子工より

演劇公演	文藝講演会	移動美術展
一女子工より	狭間二郎(三)	
運場大会へ	森山啓(三)	
兄弟	波立一(三)	
マックス・ヘルツの手記	長谷川進(三)	
闘士の面影	仁木二郎(三)	
上海印象	杉本良吉(三)	
苦闘	杉本良吉(三)	
日本狂犬にかまれる	杉本良吉(三)	

力(小説)

演劇公演	文藝講演会	移動美術展
力(小説)	支健二(三)	
日本狂犬にかまれる	金英根(元)	
苦闘	柳瀬正夢(元)	

太陽の季節

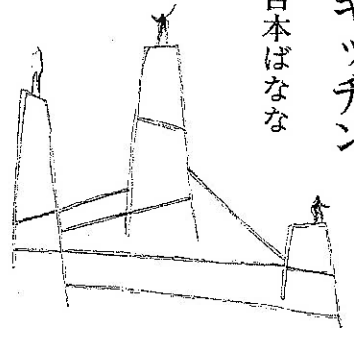


石原慎太郎

文壇新人賞 第二回候補作品

私は、この小説を書くに当たっては、従来小説に於ける常識を打破しようとした。それは、小説が単に個人の感情を表現するものではなく、社会の現実を反映するものであるべきであるという信念に基づいてのことである。この小説は、戦後の日本社会を描いたもので、主人公の成長と苦闘を通じて、社会の矛盾と人間の可能性を探求している。

キッチン



吉本ばなな

私は、この小説を書くに当たっては、従来の小説の形式を打破しようとした。それは、小説が単に個人の感情を表現するものではなく、社会の現実を反映するものであるべきであるという信念に基づいてのことである。この小説は、戦後の日本社会を描いたもので、主人公の成長と苦闘を通じて、社会の矛盾と人間の可能性を探求している。

私は、この小説を書くに当たっては、従来の小説の形式を打破しようとした。それは、小説が単に個人の感情を表現するものではなく、社会の現実を反映するものであるべきであるという信念に基づいてのことである。この小説は、戦後の日本社会を描いたもので、主人公の成長と苦闘を通じて、社会の矛盾と人間の可能性を探求している。

私は、この小説を書くに当たっては、従来の小説の形式を打破しようとした。それは、小説が単に個人の感情を表現するものではなく、社会の現実を反映するものであるべきであるという信念に基づいてのことである。この小説は、戦後の日本社会を描いたもので、主人公の成長と苦闘を通じて、社会の矛盾と人間の可能性を探求している。

3 次の文章は、『自由』の危機―息苦しさの正体―(集英社新書 2021年)に収められた作家・桐野夏生の「恐怖を感じてもなお書き続ける」の一節です。できるだけあなたの研究対象、研究テーマと関係づけながら、考えを述べなさい。

二〇二〇年九月に刊行した『日没』という小説で、近未来の「表現の不自由」について描きました。主人公の小説家・マッツ夢井が、ある日突然「総務省文化局・文化芸芸倫理向上委員会」と名乗る政府組織から呼び出しを受け、断崖に建つ海辺の療養所に収容されるという内容です。

二〇一六年に雑誌連載が始まりましたが、その前後で、二〇一三年に特定秘密保護法、一五年に集団的自衛権の行使を可能にする安全保障関連法、一七年に「共謀罪」法がそれぞれ成立しました。さらに、一九年には、「あいちトリエンナーレ2019」で「表現の不自由展・その後」の展示中止があり、『日没』を刊行した直後の二〇二〇年一〇月には日本学術会議の任命拒否問題が発覚するなど、小説執筆の前後で、個人の自由・表現の自由を制限するような動きが次々と起こりました。小説が現実を追いつかれ、そして追い抜かされてしまったという感覚があります。

先日、私が戦時中の林芙美子のことを書いた『ナニカアル』(二〇一〇年)を読み返す機会があったのですが、この小説を書いたからこそ『日没』が書けたのかもしれないと思いました。『ナニカアル』の舞台は、治安維持法によって苛烈な思想弾圧が行われていた時代です。治安維持法は当初共産党とそのシンパを取り締まるためにつくられたのですが、徐々にその適用範囲を広げていって、共産党とは全く無関係の人たちまで検挙するようになりました。

林芙美子の場合も、最初は毎日新聞記者の斎藤藤太郎との不倫を責められるのですが、そのうち斎藤がスパイ容疑をかけられ、彼女自身も監視されるようになる。そうなつてくると、厭戦的な言動もしづらくなつていき、どんどん表現の幅が狭められていく。芙美子ではありませんが、人は自分が制限されることで、今度は他人に対しても制限を強要していくものです。

『ナニカアル』を書いたときに、そういう制限が拡大していくメカニズムの恐ろしさを感じたのですが、今回のコロナ禍においても「自粛警察」みたいなものが出てきて、似たような恐ろしさを感じています。

私が『日没』を書くとした直接のきっかけは、東日本大震災以降、世の中の雰囲気が変わってきて、何か締めつけられるような感じが強まってきたことに対する危機感だったのですが、その大本には、『ナニカアル』を書いたときの恐ろしさがあり、それらが全部一緒になつて出てきたのだらうと思います。

この何とも言えない圧迫感を実感したのは、東日本大震災の原発事故を題材にした『バカラ』(二〇一六年)を書いていたときです。私は原発事故のほぼ直後からあの小説を書き始めたのですが、あの当時は、原発推進派と反原発派とが鋭く対立していて、ネット上でも激しい言葉が飛び交っていました。そうした情報に接していると、原発のことを書いている自分もいつか攻撃されるのではないかとという恐怖感がありました。家の前に黒塗りのバンが停まっていると、もしかしたら監視されているのではないかと疑心暗鬼になったり、パソコンの立ち上がりがちよつと遅いと、パスワードを盗まれて侵入されているのではないかなどと思ったりしたこともあります。

また、この作品に関して、ある作家に推薦文を依頼したところ、「政治的なことには関わりたくない」という理由で断られたこともありました。私は、むしろ関わりたくないことが政治的だと思うのですが、こうした「自粛」の仕方からも時代の変化を感じました。

(中略)

作家になつてもう二六年以上経ちますが、最初の頃は本当におたおたしていて、荒野に素っ裸で立っているような感じで、その当時はまだネットも普及していませんでしたが、何か言われるのではないかと、どこからか攻撃を受けるのではないかと怖かった。

いまだって恐怖がなくなつたわけではありませんが、目の前にむごい世の中があるわけですから、それに対する憤り、あるいは真の絶望を誰かが書かないといけない。もちろん、そういうことを書けば風当たりも強くなるのですが、そこに書かれた言葉からどういうイメージを受け取るかは一人ひとり違う。つまり、本を読んだり物語をつくるということは、他人が自分とは違うことを考えているということを容認することでもあるわけです。

こういう時代であるからこそ、言葉によって紡がれた物語がいかに大事であるかを改めて感じています。私自身は物語をつくるのが好きで、その中に耽溺(たんとく)しているだけなのですが、これからも臆(おそ)することなく、漂白された正義ではなく、本物の「絶望」を描いていきたいと思っています。

日本語学

日本語学を専攻する者は、次の一・二・三のいずれかを一題選択して解答せよ。

一 左に掲げたものは日本語学史に著名な文献の一節である。これについて以下の設問に答えよ。

- 〔設問一〕 この文献の書名を答えよ。
- 〔設問二〕 この文献の刊行年を答えよ。
- 〔設問三〕 この文献の著者名を答えよ。
- 〔設問四〕 この文献の序文(左掲部分)をすべて翻刻せよ。
- 〔設問五〕 この文献の日本語学史上の価値を論ぜよ。

一世は行阿といふ人の假名文字遺といふおも
 て序は云。京極中納言定家家集拾遺愚草
 乃遺書を頼父河内前司于時大炊親行は洩すはれ
 くる時親行はてををねにえといひその文をみ
 かつらうは流あつはうてとすのえわさうなる
 ゐる。然るに流をよはまのためは定家なるへさ中
 葉門はすてふもふもさう同本より思ひいりうな
 り。はる主主豊大炊存のふあうてを中作れ
 々る大板めははさるさるすす不悉其理相けり
 やて別合題をれ案。然る又字遺を定家親行ら
 抄出し流觸やがう行阿思案とるは推者の製作
 としてふ名の板まの字をけは流は縮さうて又字
 の数乃とくるはたかひをねにえ同流のみにて智
 ね各別乃要用とつては謂を流言先を達のれを漏
 されうてとあるは是非の迷をのりかへためな
 追てゆつたのふもはうてふもふもはわはうてふも

字を流あつはうてとすのえわさうなるへさ中
 葉門はすてふもふもさう同本より思ひいりうな
 り。はる主主豊大炊存のふあうてを中作れ
 々る大板めははさるさるすす不悉其理相けり
 やて別合題をれ案。然る又字遺を定家親行ら
 抄出し流觸やがう行阿思案とるは推者の製作
 としてふ名の板まの字をけは流は縮さうて又字
 の数乃とくるはたかひをねにえ同流のみにて智
 ね各別乃要用とつては謂を流言先を達のれを漏
 されうてとあるは是非の迷をのりかへためな
 追てゆつたのふもはうてふもふもはわはうてふも

二 次は『分類語彙表』の一部である。これを見つつ、後の問いに答えよ。

8 いっぱい 満々 なみなみ *満員 大入り

不入り 山盛り 満身 満腔 腹いっぱい

たらふく 手いっぱい *フル *ぎっしり

みっしり みっちり こってり こてこて

9 多額 少額 高額 低額 満点

10 年かさ 年上 年下 同い年 11 *安い 低廉

割り安 格安 二束三文 *高い

*高価 廉価 じり高 *ただ

12 *高圧

13 緻密 稠密 密 繁い びっしり 疎 まばら

3.195 多い・少ない

1 *多(た) 少 *多い *多く あまた *沢山

盛りたくさん *いっぱい *おびただしい

少なからず *多分に しこたま *うんと

たんと たんまり どっさり ふんだんに 数々

わんさと うじゃうじゃ うようよ

2 *無数 無辺 無量 巨万 無尽蔵

千万(せんばん)

3 *幾多 多大 甚大 莫大 過多 多端 多作 多才

幾重にも 無限大

4 *少ない *少し *少々 *いささか うすうす

ほんの *わずか 僅少 些少 *乏しい 零細

最少 軽少 軽度 *多少 ちっと *ちよっと

ちよいと ちよこっと ちよっぴり ちびり

ちびちび ぽっちり ほんのり

5 残り少な なけなし

6 *ゆたか *たっぷり *豊富 潤沢 豊満

7 ざら

※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。
国立国語研究所(2004)『分類語彙表増補改訂版データベース』(ver.1.0)

〔設問一〕 分類語彙表について知るところを記せ。

〔設問二〕 分類語彙表の文法研究での利用について考えるところを記せ。

〔設問三〕 「多い数」と言い方は自然であるが、「*多い人」とはふつう言わず「多くの人」と言うほうが自然である。このことについて考えるところを記せ。

〔設問四〕 「4」には、

*少ない *少し *少々 *いささかうすうす、ほんの *わずか 僅少 些少 *乏しい
零細、最少 軽少 軽度 *多少 ちつと *ちよつと、ちよいと ちよこつと ちよつび
り ちびり、ちびちび ぼつちり ほんのり

が挙がっている。これを文法的な観点と意味的な観点から自分なりに再分類し、その分類について説明せよ。

和漢比較文学

左の文を読み、次の問いに答えよ。

- (1) この資料の全文を、資料に施されている訓点も含めて全て翻刻せよ（漢字は通行の字体を用いること）。
- (2) この資料の全文を漢字仮名交じりの書き下し文に改めよ。
- (3) ここに記されている内容を現代語訳せよ。

第六比興八作勢

比興八作勢者遇物如本文之意便直樹
兩三句物然後以本意入作比興是也

昌齡贈李侍御詩云青冥孤雲去終當暮

歸坐王杖吾第何時見龍顏又云眇然客

子魂條鑠川上暉還雲慘知暮九月仍未

歸又遷客又相送風悲蟬更稀又崔曙詩云

夜甚一聞元時盡逝水東流何處還又鮑照

詩云庶鳴思深草蟬鳴隱高枝心自有所

疑傍人那得知

受験番号	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

ここから記入すること

「近代」以外の解答用紙

〔日本語日本文学〕

* 選択分野に○を記入すること。

- ・上代
- ・中古散文
- ・中古・中世韻文
- ・中世散文
- ・近世
- ・近代
- ・日本語学
- ・和漢比較文学

総 点

--

(次頁へ続く)

[illegible]

[illegible]



日本語日本文学(近代)解答用紙(その一)

1



日本語日本文学(近代)解答用紙(その二)

2 ① 作者 () 作品 ()

2 ② 作者 () 作品 ()

2 ③ 作者 () 作品 ()

日本語日本文学(近代)解答用紙(その三)

2 ④ 雑誌名 (主要執筆者)

2 ⑤ 作者 (作品)

7/8

2 ⑥ 作者 (作品)



日本語日本文学(近代) 解答用紙(その四)

3

8/8

